

第2回 射水市文化振興・文化施設在り方検討会 議事録

- 1 開催日時 令和3年11月18日(木) 午前9時30分～11時45分
- 2 開催場所 射水市役所201会議室
- 3 出席者
 - (1) 検討会委員
安嶋委員、藤井委員、櫛岡委員、大谷委員、広田委員、野上委員、
加納委員、牛塚委員、伊藤委員
 - (2) オブザーバー
富山県生活環境文化部 文化振興課長
 - (3) 事務局
市民生活部長、市民生活部次長、地域振興・文化課長、地域振興・文化課
副主幹1名、芸術文化振興係員2名
- 4 欠席者 和田委員

会議次第

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 資料説明
- 4 意見交換

文化振興・文化施設の在り方に関する意見交換

(座 長)

意見交換に入るが、説明いただいたアンケート結果を見た上での感想や意見の後、文化振興施策の在り方についての意見を伺う。

まず、今ほど説明いただいた内容についての意見、質問をお願いします。

(委 員)

資料6の1ページに“関心がない市民に対する取り組みが必要”とある。そのとおりだと思うが、それぞれ一人一人を見つめると、芸術文化に興味のある人、スポーツに興味がある人、文学や書物を読む人等、嗜好や関心対象が違う。いろいろ広めて、一人でも多くの人に芸術文化に触れていただくことはとても良いことであり、関連性も探ることができればと思った。射水市内には総合型スポーツクラブが組織されて各体育館等で活動しておられ、その中で“よさこい”の団体も活動しているが、どこのジャンルに入るのか。

また、文化芸術ではないが、曳山が国の文化財になった。以前から新湊小学校や放生津小学校では、曳山囃子の指導者を招聘して、少しでも触れる、参加型の触れ合いを重視している。そのように、小さい頃から芸術に触れ、発表の場も確保できれば、大人になっても続いているかもしれないし、しばらくやらなかった人が大人になってから「また参加させてもらおうか」といった広がりや深まりが出てくるようなことも考えられる。

(座 長)

前回の意見交換では、芸術文化の話が多かった中で、今回追加で埋蔵文化財や鍔絵などの地域文化という言葉について追加するという話があった。今の話は、かなり古い地域の伝統文化の取り扱いについてであった。事務局から何かあるか。

(事務局)

“よさこい”については、舞踊のジャンルに含まれる団体でも踊ることはある。ブームの時には多くの団体が芸術発表会で踊られていた。ただし、“よさこい”大会に出場するような若い人々の団体は、“よさこい”のグループの中だけで活動していると思う。

(委 員)

そういったものも取り入れていけば、より身近なものとして広げられる可能性はあると思った。実際、稚児舞も小学校で教えているということをお話しさせていただいた。11月にある地域の文化祭では、子どもたちが稚児舞を踊る。全国パークゴルフ大会が下村を中心にあった時の歓迎行事でも披露させていただいた。子どもたちは、関わったということが気持ちの中にあり、それを誇りと感じられるようになっていくと、「芸術文化を後世まで自分たちが担っていこうか」とか、「何かあった時には関わりたいな」という気持ちに、いい方向で変わっていけば良いという思いであり、市のほうでも心がけていただきたい。

(委 員)

資料から、高齢化と施設の老朽化の状況がとてもよく見えた。老朽化に関してはお金を投資するしかないが、高齢化のことは、若い人たちの人材育成、今の若い人たちが文化に触れていける環境作りが大事だと感じた。射水市展は2年ぶりで開催したが、今年は高校生たちが参加できる美術展が軒並み中止になり、その影響で出品参加が多かった。ただし、

この傾向が続く土壌ができていない、魅力的な展覧会ではないということが大きな課題と
思っている。市町村合併をするまで大門総合会館のボランティアを務めていた。ホールとして
は物足りないが、練習施設としては活用幅が多い良い環境であった。

市町村合併した時、特化して落語専用ホールにするなどの意見を出した記憶もあるが、現
在は利用されていないということを感じた。今、“よさこい”の話が出たので、この場所は“よ
さこい”の練習場所など、少し違う改装の仕方があるのではないかと思った。

それまでは、思い切って美術館にできないかと考えていた。最近では、デジタルアートやメ
ディア関係で特殊なデジタルライゼーションのような発表表現が増えている中で、普通にホワ
イトボックスの美術館ではなく、真っ黒なホールの中で、光るアートなど特殊な施設に生ま
れ変わらせることができるのではないかということを考えていた。

eスポーツというジャンルがあり、高岡市で施設が増えている。行ってみると多くの若い
人たちがいた。若い人たちの動きをいち早く理解し、大学もあるので、大学生をうまく取り
込んでいくことも考えて、若い人たちが活躍できる環境づくりを考えていけばいいのではな
いかと感じた。

(座 長)

昨日、高岡市の総合計画の委員会に参加したが、高岡市の総合計画ではeスポーツに力を
入れる方向になっている。

射水市でも、eスポーツがよいかはともかく、文化振興のために機能を特化した施設が必
要なのではないかという議論は必要だと思う。文化振興のために、どのようなものがよいか
意見を出していただきたい。事務局から何かあるか。

(事務局)

これから、施設の老朽化に対応していくにあたり、ただ漫然と直すことは難しい。文化振
興のためになる機能についての意見を参考にしながら検討していきたい。

(委 員)

主に絵本館で活動しているが、このアンケートに“興味がない”が一番多かったというの
を見て、やはり何か宣伝が必要と思う。

以前、射水ケーブルテレビの「5館ネット」という番組に出演しているとき、絵本館、ラポ
ール、陶房「匠の里」などから情報発信した。匠の里でひな人形を作るなど、いろいろな活動
をさせていただき、施設の内容がよく分かった。テレビに出ていたので、知らない方から声
をかけられることがあった。「5館ネット」がなくなってしまったからは、周りから何か催し
が行われているのか聞かれるようになった。新湊博物館の開催中の企画展なども分かりやす
かったので、そういう番組の効果は大きいと思う。

(委 員)

「5館ネット」は、射水ケーブルテレビの企画で、簡単に言うと、文化的な施設の方々の
ネットワークがあった。いろいろと交流があって、順番に番組化してケーブルテレビで放送
していた。

時期的には、ちょうど合併の頃だった。人的な交流にも繋がる部分もあり、必要なことだ
ろうと思うので、早急に検討する。

番組という形にするかどうかは検討してからにするが、今ほどの意見は、芸術文化のネッ
トワークの必要性と、それを映像化して見ていただくことを言われたのだろうと思う。射水

ケーブルテレビ放送が、ネットワークを再構築し、ケーブルテレビ放送で見ていただくことを考える。どういう形でネットワークを組めばよいか、行政にも相談しつつ考える。

(委員)

関連して、以前、射水ケーブルテレビがコミセン紹介、地域紹介という企画を行った。あの頃は月に1回ぐらいのペースで、いろいろな地区の紹介があり、確かに地域の方はもちろん、市内の方も、あそこへ行ってみたいとか、見ず知らずの方がテレビで紹介した日宮城址の場所の質問に来られたのを思い出した。

(座長)

市民意識アンケートの中で、活動しない理由が、“興味・関心がない”ということがあった。特に理由がないというのは、文化に関わりのない人たちに対する啓発が重要になってきているということが読み取れる。いかにアプローチするかという中には、ケーブルテレビの活用が重要になってくると思う。また、ネットワークについては、最近では産業や福祉などのいろいろな分野に渡るところにアートに関わる部分があり、そういったネットワークづくりというのも重要になってくると思う。

(委員)

今ほども話題になった市民意識調査の“興味・関心がない”。多いとは思っていたが、学校現場という立場から、こういう“興味・関心がない”という人に刺激を与えていくことが大事と思う。子どもたちに文化芸術に触れる機会を継続して充実させていく、そういった仕掛けや種まきをパッケージングし充実させていくことが大事なのではないかと思った。資料1であった令和2年度に中止となったアウトリーチコンサートについては、小杉南中学校と射北中学校で先日行われた。久々に全校生徒が集まるイベントとなった。コロナ禍のため、合唱コンクールも分散型で行っており、いい機会になった。

アウトリーチコンサート等は、中学生になると、よいきっかけになる子もいるが、趣味の好みが固定化してきており、小学校5～6年にもコンサートがあるが、もっと低学年で行ってもよいのではないかと思う。先日本校であった演奏会では、子どもが聞いても分からない曲が演奏され、その内容も吟味していけばと思う。小学校低学年から、機会があれば良いと思った。美術では、中学校では射水市連合の美術部の写生大会があり、その作品が6校で巡回している。学校でのプチ美術館のようなものがあれば、子どもたちも美術館に行かずして、触れる機会ができるのではないかと思う。音楽のアウトリーチコンサートの美術バージョンのようなことができるのではないかとも思った。

スポーツに興味のある子どももいる。学校現場では「富山県教育振興基本計画」があり、キーワードが“次世代を担う子どもたちの文化活動の充実”とともに、“元気を創造するスポーツの振興”となっている。やはり種まきだと思うので、文化に興味を持つ子、スポーツに興味を持つ子、いろいろな種まきをしていく中の一つとして、文化振興を継続さらに充実させていけばよいと思う。

二つ目、文化ホールの利用者アンケートがあったが、本校吹奏楽部は、先日アイザック小杉文化ホールで定期演奏会を行った。非常に適した規模のホールで使いやすく、見栄えも良くて良い演奏会ができた。一方、来年の3月に社会人吹奏楽部団体が高周波文化ホールで演奏会を行う。それぞれのホールに良さがある。どのホールも特性もあり、大事にしてほしいと思う。大門総合会館は会議等で使いやすい利点もあり、それぞれに良い点があるのかなということ、アンケートの結果にも感じた。

(座 長)

利用者アンケートを見ると、それぞれに特徴があつて、良い部分がある、その部分を活かしながらホールの機能や在り方の研究をしていくということが重要と思う。

今の話で、吹奏楽には、中学生と社会人の人たちの交流というのものもあるのか。

(委 員)

過去に新湊地域吹奏楽振興会があり、小・中・高・高専・社会人が集う吹奏楽イベントがあつた。時代の流れ的に、他の活動が多いため、そのことを考慮して振興会も解散という形となった。現状では、なかなか交流する機会はない。

(座 長)

射水市は、社会人の吹奏楽も盛んで、小中学生もかなり熱心にやられている。今後学校現場が部活も厳しくなってくる中で、うまく地域と連携するという文化振興の形というのが可能ではないか。

(委 員)

アンケートから、60～70歳代の高齢層の活動は、部門にもよるが、全体の中でもっと多いのかと思っていたら、コロナのこともあるとは思いますが、案外少なかった。

文化活動というと、時間とお金に余裕がある高齢層の世代が活動をしているイメージがあるが、できればファミリー層や小さい子供からお年寄りまで、皆が気軽に楽しめる文化活動ということを考えられるとよいと思う。

射水市の施設はそれぞれ素晴らしいところはあるが、それにプラスアルファする要素として、特に観光や海の幸を中心にした食文化があるのではないかと。県内外のたくさんの人が訪れたい魅力があり、それぞれの文化施設に気軽にリフレッシュできるようなカフェやレストランがあればよい。県の美術館では、ぜひカフェやレストランを、と言わせていただいたことがある。県の美術館でも店舗が入れ替わるなどの苦労はあるが、新しいレストランなどができると人は集まるのではないかと。

文化活動をするには気持ちのゆとりがないとできないのではと思うが、「ちょっとリフレッシュしようか」、忙しくても「おいしいものを食べに行つて、催しを見たり聞いたりしようか、活動もしようか」など、いろいろなきっかけができる場所がいくつもあれば、予算のこともあつて大変だと分かるが、地域に特化した面白い食べ物がある場所であるとか、それぞれの魅力づくりができればよいと思った。

文化の継承ということで、音楽が盛んであったり、地域の伝統行事が多くあると聞いた。学校教育の場では、大勢の子どもに対応する必要があつて、部門に好き嫌いはかなり出るとは思うが、好きな子供がいたら、ぐつとそれにはまり込んでいく。中学生になると特に部活動では、多分野の活動にはそれぞれ、子どもたちだけではできない大人の手助けがいることもあると思う。教育という立場からすると、その人たちの責任が大きいと思う。

芸術家と呼ばれる人たちは、特に美術は好みがはっきりしており、自分のスタイルを通す人もいるので、人材育成をどういうふうにするかというのは難しいことではある。子どもたちは何色にも染まるし、指導者次第でどんどん変わるので、学校教育と社会教育の2本立てで、自由に選べる場所があつて、良い指導者がいて、良い空間があつて、そこへ行けば楽しい学びの体験ができるというものがよいと思う。

展覧会は、子どもたちにとって大変有意義なものであり、一人一人の作品はとても小さくても、たくさん集まれば大きなテーマも表現することができる。子どもの心を活性化できる、

子どもが喜び親も喜び、たくさんの家族が見に来る。という話題づくりとなる。子どもにあった子ども向けの適切な場を作らなければならない。そのために人材は必要だと思う。射水市のイメージとして、子育てのしやすい、若い人たちが楽しめる、活気にあふれる市というイメージがあるのでお願いしたい。

(座 長)

多様な世代が文化に関われる仕組みづくりということが、文化政策を考えていくうえでも重要だと思う。“食”というものは、射水市の重要な文化資源であり、文化というもので取りくんでもいいし、他分野との連携で考えてもよい。そういう中で文化振興を図ることが必要と思う。

(委 員)

一番強く印象に残ったのは、39歳以下の無関心で、結局それは幼児の保護者が無関心ということ。幼児は自分の足で文化芸術の場には行かないため、そこに機会格差、体験格差がついてしまう。やはり“届ける”ということが大事。今まで興味のある人に来てもらっていたという流れの大きな転換だと思う。

関心がない人に届けなければならないこと、自分は専門が自然保護活動であり、全く同じ課題を持っている。今までは自然が好きな人が自分から来ていた。これからは自然に関心のない層に届けなければならない事態になっており、そう考えるとコーディネーターはキーと思う。今の文化振興財団が悪いということではないが、長く大過なく続けていくということが得意な人にとってはスピード感を持って異分野とコラボレーションするというのは苦手かと思うので、そこに新しい人や仕組み、新しいコーディネーターの仕組みを入れたいと思わないと思う。

事例として、富山福祉短期大学がUSP館という新しい建物を建てたが、この施設をうまく活用できていなかった。1階のガラス張りの玄関ホールがあるが、館長から「あそこを使って何かやってみないか」と誘われた。それで6年間、森の幼稚園の写真を撮り続けているフォトグラファーの方に声をかけたところ、その人から木作家さんに声をかけられ、木で森を作り出してくれた。それを聞きつけたお点前をする人が、そこでお茶席をされることになり、ピアノを弾く人がピアノの演奏をすることにもなった。面白いことをやると面白い人が集まる。

ドイツの小学校では、学校の先生と地域の音楽家の人が、クラシックの演奏で入学式をお祝いしてくれる。日本では、全くあり得なかったコラボだった。ぜひコーディネーターに力を入れていただきたい。

(委 員)

一つはリモートの件であるが、アンケートで鑑賞を含めて15パーセントという数字だったが、コロナ禍の中では低いのではないかと。ただし、全てがそうではないと思う。中学校の場合、合唱コンクールだけ実施したという中学校が結構あったが、射水ケーブルテレビでは小杉中学校と小杉南中学校から相談を受け、保護者の方は来られないので、YouTubeにアップしようということになった。ところがYouTube Liveにアップしようとしたら、中学・小学校は全て専用線でネットワークを結んでおり、YouTubeにアクセスできないようになっていた。ライブ放送はできないということで、録画したものをYouTubeにアップして保護者の方に連絡し視聴していただいたが、小杉中学校で2,000近いアクセスがあった。小杉南中学校からも同じようにお問い合わせされた。ケーブルテレビで保存するのはもちろんであるが、エリア外の

方々にも見ていただけるこのリモートにおける部分は、もう少し強化されてもいいと思う。

もう一点、若い世代は、もはや集める時代ではなく、出向く時代になっていると思う。それを考えると、一番大事なのは、芸術文化をこの若い世代にどうアプローチするのか、おそらく射水市にとって一番大きな課題であろう、そのためにはアウトリーチのように出向くべき、バスを仕立てて集めるべきではない、そこに切り替えて、体育館は施設ほど音響効果が良くないかもしれないが、目の前で聴ける、見られるという環境作りが必要。文化ホールに行けば音響効果は良いが、そうではない視点で、若い世代にどうアプローチしていくか最重要で考えていくべきだという気がする。

(座 長)

方向性として、鑑賞機会の拡大や参加の拡大という中で、“届ける”という視点が必要ということになる。“オンライン”や“出向く時代”という、今までの待ちの姿勢ではなく、射水市型の文化振興のあり方としては、そういうところに力を入れることが大事だと思う。

美術の展示について、オンライン美術館のようなものが、簡易な形でできるようになっている。Google ストリートのように特殊なカメラで撮影し、専用のサイトに綺麗にアップできる。さらに3Dカメラがあれば、作品そのものをかなり精度が高く配信できることも可能になってきている。お金がほとんどかからないようにできるようになってきている中で、率先して取り組むようなことが文化振興に必要と思う。

アンケート、意識調査に基づいた意見では、無関心層にいかにかアプローチするかという重要性、それは待ちではなく“届ける”ということであり、“つないでいく”ということを確認できた。

ここからは、文化振興の在り方について足りない部分についての意見交換をしていきたい。できれば、文化振興のこういう部分が射水で必要なのではないかという意見の中で、だからこういう施設の在り方、施設の機能が必要になるのではないかということ意識していただきたい。財政が厳しくなってくる中で、出来る範囲での形を検討していくということになる。

(委 員)

小学校の教員もしていたので特に感じるが、少年期の間にはいろいろな経験を重ねるには、“出向く”出前授業などの形で市の施設との連携が必要ではないか。例えば、博物館、匠の里、埋蔵文化財センター、鍍絵などに関して、どこにどんなものがあるか知らない人が多いということがある。それにも関連するが、小学4年生は、粘土でシーサーを作って展示している。しかし、匠の里でおひなさまを作ることができることを知っている、タイアップして匠の里と連携をし、世界に一つのおひな様を作ろう、といった授業に結びつけ、また匠の里に足を運んでもらうような発展があるのではないかと思う。博物館、埋文であれば土器づくり、勾玉づくりがある。

片口小学校在籍時、火の回りに穴を掘って土器を並べ、昔の調理方法を社会科で行ったこともある。子どもたちは料理ができあがる間に組紐を作った。鍍絵もそういったところに位置づけるとか、いろいろな形で連携をしていただく。特に小学校の場合は、中学校のように専門教科ではないため、それぞれの得意不得意も大きく、差が出てくるところもあることから、施設の職員の専門性も活かしながら経験を広げ、その中から「自分はこの分野が好きだな、もうちょっと深めてみたいな、やってみみたいな」ということで深めていくことを射水市としてのモデルみたいな形でやっていけば、違った形で芸術文化に触れるということになると思う。小さい間に経験を積ませるようなことをぜひ企画し、庁舎内で連携を取って試していただければありがたいと思う。

(委員)

今の話に関連するが、中学校と高校は夏休みの宿題で美術館へ行こうという課題がある。それぞれ自費で、必ず県内のどこか美術館に行って、課題を作成し提出するものだが、市内の小学生や中学生に夏休みの課題として市内の施設、例えば匠の里で無料の体験、コミュニティーバス1日フリーパスもつけていただき、お金はかかるがそういう取り組みも良いのではないか。

(委員)

黒部市美術館の運営委員もしているが、黒部市美術館はとても小さい美術館で、なかなか入館者数が伸びないため、目下アウトリーチに力を入れている。黒部市内の小中学校に対してのアウトリーチの数が多く、学芸員は大変であるが、出かけていろいろなことを紹介して体験してもらうべきで、次は美術館に来てもらって実際に本物を見てもらう、という流れを作るために、ここ5～6年頑張っておられる。ようやく最近、その成果が出始めている。施設自体も一緒にアウトリーチのことを考えていくということが大事と思う。

今、小学校や中学校は、学校の時間内は余裕がないということをよく聞く。そこに地域がどういう風に入り込めるか分からないが、時間割の中で“観る”時間というのはできるのか。

(委員)

実質活動する時間が1時間としても、施設への移動で、行き1時間、帰り1時間とすると半日が潰れてしまう。だから、申し訳ないけれども、施設側に足を運んでいただいて、子どもたちが活動する時間を1時間のものなら2時間にするとか、今からの大きな課題という気がする。

(座長)

本当は施設の話もしなければいけないが、施設を出ていくということが結構スタンダードになるのではないか、コーディネート機関、箱という役割というより、シンクタンクというか教育文化の考える機関としての役割を施設に担っていただくというのが求められると思う。

(委員)

リアルとバーチャルの並存が前提条件になると思うが、美術館を作った方がいいという意見があった。当然できればいいと思うが、どう考えても数億円をかけて美術館を作り、その維持費を考えると、困難である。バーチャル空間でそういうものができるとすれば、当然企画展もできるし、いろいろなことができる。ただリアルは大事なことではあるが、リモートで見られるということを考えると、射水市はDXを進めているので、バーチャル空間で簡単に作れるものがあるとしたら、そこで視聴していただくというような考え方を持つ必要があるのではないか。座長の簡単にできるという話を聞き、チューニングも簡単に出来るようなので、そういう形で作るという視点も必要かという気がした。

(委員)

それに加えて、例えば展示場で3Dカメラのようなものを被って観ることで、臨場感や色々なものを合わせもった展覧会を行うと、可能性はもっと膨らむ。

その場合、ある程度は料金も取ってもよいかも。また、課金システムは簡単にできるので、有料企画展のようなものも可能だろう。

(委員)

最近、オーバードホールでの芝居を東京や外国で公演されているが、コロナ禍で多人数が入れないということもあるので、役者の手元を見ながらVRで衝撃や風を受けながら観るということをされている。富山出身の演出家の方だが、そういう人もおられる。

(委員)

コーディネーターについて、例えば中学校で行われたアウトリーチコンサート、どなたかコーディネートされているが、今日の会議みたいにそれぞれの分野に精通した人がいるわけではない。そのようなコーディネーターをお役所だけではなく、そういう中から出していいのではないかと。何年前、「小学校高学年の音楽鑑賞会で何をすれば良いか分からないから何かないか」と言われ、プロの楽団のアンサンブルを呼んだこともある。県の芸術文化協会の事業で、県民ふれあい公演のプロデューサーをしているが、今年は高岡商業高校と高岡の定塚保育園で演奏する。いろいろなジャンル、洋舞、詩吟、オーケストラなどがあるが、各分野でそれぞれお任せしている人がいてうまくやっている。さらには、本物に触れるということで、指導者招へい事業の講習会もイメージしており、それぞれの分野のコーディネートがうまくいって県の文化振興の施策は大変素晴らしい。約20年、県の文化振興課と県の芸文協がリンクしており、そういう形もなにか模索していけばいいのかと思った。

(委員)

芸文協を預かっている立場で一言だけ申し上げる。今まで我々は、合併前に各市町村に1つつ文化ホールを是非にということで、その結果が現在の状態として残っている。それは築30年前後経つと老朽化し、合併して大きいもの一つにしてしまうという意見もある。果たしてそれはいいことなのかというのは、今までの話を聞いても、問題だと思う。高周波文化ホールは1,200名という射水市では一番大きな座席数を持っている。アイザック小杉文化ホール、大門総合会館と規模は少しずつ小さくなり、なかなか扱いに悩むところであるが、逆の見方をすれば各々のホールの持ち味を發揮できるような方向性を別々に考えていくほうが、理にかなっているのではないかと思う。1,200の座席数という高周波文化ホールの場合、一番の問題点は、お客さんの車の処理である。文化ホールの駐車場はもちろん、隣の三日曾根の公園を借り上げ、大体日曜日の行事であるから新湊小学校の前庭も借り上げ、そこへ車の整備員を何人も張り付けるが混雑する。しかし、先日の日曜日に第15回の芸能フェスティバルを行ったが、たいへんうまくいった。理由は簡単で、コロナ対策で座席数を800にした。今後は、より大きなものという方向性よりも、ホールごとに、このようなことをやってみたらどうか、というような方向性を模索するべきではないか、というのを各委員の意見を聞いて考えさせられた。

また、小学校・中学校への出前講座に関しては、数年前から、芸文協のいろいろな分野で開始しているところもある。全ての分野が一斉に行うわけではなく、各小学校・中学校の意向を聞いて実施している。

もう一つ、話は変わるが、コミュニティセンターは、昔の公民館にあたるが、合併前に27館あった。橋下条コミセンは、小学校の統廃合の交渉の結果、面積が建坪1,000平方メートルある。その半分は体育館機能を持っている。したがって、かなり的人数の人が一緒に活動でき、先ほど“よさこい”の話が出たが、ある“よさこい”の団体も数年前から活動拠点にしている。そのほか、コミセンはスポーツ施設ではないが、卓球、バトミントンなどの活動ができる。バレーボールやサッカーのようなボール競技はできない。各コミセンの規模や施設・設備の特色に応じた活用を探っていくべきかと思う。それが芸術文化の振興に役立つもので

はなかろうかと思う。全てを会館、ホールにお願いするというのは、多少無理があるので、関連施設を活用する方向を模索していただければと感じた。

(座 長)

ありがとうございます。ほかに意見がなければ、オブザーバーの方から、ご意見をいただきたい。

(オブザーバー)

今回からオブザーバーとして参加させていただくこととなった。4月から県の文化振興課長に就任し、いろいろな会議に参加させていただいているが、今日は、具体的な議論がなされ、大変勉強になった。

まず、県の文化振興計画というものを冒頭に紹介していただいたが、平成30年度から令和8年度までの10年間で計画しており、そろそろ折り返し地点であるので、来年度に見直しを行うべく、こちらで行われたようなアンケートをとりながら、大きい柱は変わらないと思うが、今の時代に見合った計画に見直す。

かなり具体的なことがたくさん出たと思うので、県の施策を紹介させていただくことで参考にしていただきたい。先ほど加納委員からも紹介があったが、県の文化施策というのは、直営のものもあるが県文化振興財団、県芸術文化協会との連携協力で行っている施策のウェイトが大きい。

まず、県文化振興財団について。主に、指定管理者として、富山県美術館、水墨美術館、高志の国文学館、立山博物館、ホールでは、県民会館、教育文化会館、東と西の一つずつの高岡文化ホールと新川文化ホール、マリエの中にオルビスという小ホールがあり、全施設の経常的な管理運営など行っている。ちなみに美術館の展示等企画は県（館）が行っている。

県芸術文化協会さんには、音楽、舞台芸術、生活文化等様々な分野の統括団体として、県事業の企画運営協力や各民間団体、芸術団体が実施される文化事業への参画・協力を行っていただき、県の文化振興に多大なご貢献をいただいている。

県としても、これから具体的な計画作りに入っていくので、今回の意見やアンケート調査によるニーズなど、県全体としてのニーズを捉えていく必要があり、本当に参考になった。

委員からご指摘があったが、やはり興味・関心が若手に少なく、例えば、6月には県展という展覧会があるが、なかなか若い人の参加が少ない。そのため、秋のアートフェスタでは分野の壁を取り払い、できるだけたくさん入選として展示し、「少しでも参加してよかったな」としてもらえることを行い、若い方の参加を促す工夫をしている。

さらに、コロナの関係は無視できないと考えている。今は落ち着いているが、今後また流行する可能性もあるため、ウィズコロナ・アフターコロナということを意識した施策を考える必要があると思っている。

県の予算で執行をしているものの中に、コロナ対策として、令和2年度から執行しているが、ホール関係ではリアルタイム配信設備ということで、ビデオカメラやモニターなどの設備を国の財源を活用して整備してきた。実際に県民会館などでは25回前後使われた実績がある。

芸文関係では、音楽関係は、一番のニーズはそこにはなるものの、生活文化や絵画についてリモートで教室を開いていただけるようなモデルづくりが必要だろうと予算化して5～6団体程度の団体に活用していただいている。実際に会わなくても活動していただければ、現在もそれは継続している。

あとは、リアルで実施できない時の話になるが、実際活動しようと思っても、定員いっぱいのお客さんが見込めないということもあり、チケット収入と会場使用料のアンバランスが生じることがあったため、その会場の使用料の一部を補助するといった制度も作って対応してきた。

そういった形でコロナ対策を行いつつ、何人かの委員の方が言われていた課題にはなっていたが、情報発信、やはり皆さんに施設をよく知っていただくということは非常に大事だと考えている。リアルの鑑賞が戻りつつあることから、それを主体として魅力ある企画展、中のレストランと連携するなど、たくさんの人に見ていただき、鑑賞の機会を拡大するというのを今後も考えていきたいと思う。リアル・バーチャルの話が出ていたが、例えば、富山県美術館では、3月から行う“蜷川実花展”という企画展が予定されているが、バーチャルで鑑賞いただける機会の創出も検討している。新しい予算として、サンドボックス予算という年度当初には計上しないが各部局で弾力的に使える予算が計上されており、その予算の一部を活用するもの。また、やはり美術館をより知っていただくということも大事で、いろいろな収蔵品が管理され、台帳的なものもあるが、検索できるという仕組みが完全にはなっていない。少しずつ進めているが、それを電子化して、一般の方からの問い合わせに対応しやすい環境づくりということが大事だと思っている。

文化に、興味・関心のある人の発掘はなかなか難しいが、少しでも文化に興味を持ちたい、あるいはやってみたいと思う人を取り込んでいくということが非常に大事だと思っており、そのためには、それぞれの美術館・文学館、また企画や取り組み方、どう対応するかも大事だと思う。引き続き、芸文教さんや文化振興財団との連携協力のもと、コロナ対策もしっかり行い、少しでも文化に携わる方、興味を持たれる人口が増えていくようにしたい。

(座 長)

文化振興の在り方と施設の話について議論を進めた。文化振興に関して、これまでたくさんの方向性が提示されている以外に、今日は、アウトリーチという形、“届ける”、“つなげる”、施設に閉じこもるのではなく発信していく、“つながっていく”、“届けていく”、ということの重要性が観点として必要ではないかというところであったと思う。

普及啓発の部分について、本来伝えるべきところに届いていないのではないかと、という指摘もあった。その部分を拡大するため、ケーブルテレビの活用や効果的な情報発信を行っていくことの必要性、文化と多様な分野との関わりづくりをしていくということも必要なのではないかということであった。アンケートには、魅力のある企画が足りてないのではないかと、ということもあったので、企画段階のブラッシュアップも必要ということがあったと思う。

そういう文化振興を実現する上で、やはり施設にしても、老朽化あるいは財源の制約がある中で、なかなか全てのホールを存続していく事は難しいということもあると思うし、それぞれのホールに特性を持たせて機能を活かした施設利用と運用活用ということができないのではないかと、役割分担、使い方あるいは機能、位置、ホールの大きさなどいろいろあると思うが、特性をきちんと把握した上で、文化振興にどうつなげていくかという観点が必要なのではないかということがあったと思う。

施設と文化振興以外で、ICTの活用、DXの話もあった。施設が単にホールの機能ではなく、企画するだけではなく、コーディネート機能を持ち、新しい技術をもっと積極的に取り入れて伝えていく役割も持つ必要があるのではないかと思う。

全国の体験事例を調べたことがあるが、単なるオンライン上の音楽を聴くとか見るとかというだけではなく、自宅で工芸体験、自宅で楽器のレッスンを受けるといった新しい活動も出てきており、そういったものも取り込んでいくこともあるのではないかと思う。

各委員から、コーディネーターの重要性について発言があった。これは文化振興する上でも、施設の管理の上でも、どちらにも関わってくると思うので、コーディネーター機能の確保、コーディネーターという人材育成も必要だろうと思う。

大体、意見をまとめるとこのような形になろうかと思う。この内容で報告書の方向性をまとめていただくということにさせていただきたいと思う。

では、意見が出尽くしたようであるので、以上で意見交換を終了させていただき、事務局に進行をお返しする。

(事務局)

今日いろいろなご意見をいただいたが、中には今取り組んでいけるようなものがあったかと思うので、早急に取り組みたい。

この後の予定になるが、今日の議論については、議事録にまとめて概要を資料とともに市のホームページで公開する予定としている。皆さまに内容の確認をお願いすることになるので、よろしく願います。またこの検討会の成果として、報告書を作成し、市議会の3月定例会に提出する予定としている。お集まりいただくのは今回が最後になるが、その内容についても皆様に一度お送りさせていただき、内容をご確認いただいた上で最終的には座長とお諮りして完成させる形とさせていただくので、よろしく願います。これで第2回の射水市文化振興・文化施設の在り方検討会を閉じさせていただく。